

## さよなら人生

生きてる

静かで広大な宇宙に、一隻の宇宙船が浮かんでいた。どこへ向かうわけでも無く、ただ彷徨うそれはヒマワリの種のような形をしていて。表面に英語で「地球号」と書かれていた。

外の環境とは異なり、種の中は賑やかだった。十代前半の少年少女、六人がテーブルを囲み、気の抜けたコーラを乾杯して、ピザ味の宇宙食を食べていた。人工重力でちゃんとみんな席についていた。一番背が高く、金髪で恰幅のある少年が立ち上がった。

「やあ、みんな、おはよう！ グリニッジの時間は朝十時。俺たちはおねぼうさんだ。冷冻睡眠から起きると、こんなにお腹が出てしまっていたよ。せつかく健康な美男美女つてことで選ばれたのにね！」

性別は男女三人ずつ。顔立ちも、出身地もばらばらだったが、全員の共通言語は英語だった。

髪をドレッドにした黒い肌の少女が、楽しそうに笑いかけた。

「似合ってるよ、ロバート。初対面の時よりとっつきやすいね」

ロバートと呼ばれた少年は「アマレ、そうは言つても服が入らない」とおへそを出してジャンプした。中国系の少年がおつとりと注意した。

「コーラがこぼれるよ」

「一体出発してから何年経つたのかしら？ お父さん、お母さん……ええん」赤い髪を三つ編みにしたそばかすの少女が泣き出した。それをアジアの青い伝統衣装で身を包んだ少女が慰めた。

「分かっていた事でしょう、オーリガ。通信ボックスを見るといいわ。きっと数え切れないくらいメッセージが来ているから……。ねえ、シード、繋いでくれる？」

丸い機械がコロコロと転がってきて、「オーリガ、ナクナ！ ナクナ！ ファーティマ、ヤサシイナ！」と生意気を言つた。そして目から光を出して、壁に映像を投影した。その宇宙船に乗っている六人全員の両親が、交代で挨拶した。元気にしてるか、こちらは大丈夫。震災があつた。火山の噴火があつた。けれどあなたたちは生き残って、地球の遺伝子を継いで欲しい。ところが、ぶちつと途中で映像が切れた。南米系の少年が鬱陶しそうな黒髪をなぎ払つて、メッセージに涙していた一同へ、剣呑なまなざしを送つた。オーリガが跳ね上がつた。

「なんで消しちゃうの！？」

ファーティマが少年へきつくあたつた。

「マテウス、あんたなんで選ばれたの？ ネガティブなことばかりするのね」

マテウスという少年がシードを抱えてぶつきらぼうに言つた。

「こんな見たつて仕方ないだろ。どうせ弟も妹も、俺たちより先に歳取つて、じいちゃんにならんばあちゃんになるんだ。その方が悲しいだろ。なあウエイ」

中国系の少年、ウエイは突然話を振られて困惑して、うつむいてしまつた。

ロバートが暗くなつた雰囲気をぶち壊すように、コーラをいきなりマテウスの口にあてがつた。

「まあまあ、喧嘩はやめようじゃないか！ こんな宇宙で仲違いしたつて、逃げ場なんかないぜ！ 気楽に行こう！」

そのとき、ビー・ビー・ビーと宇宙船中に警報が響いた。シードが反応した。

「ワクセイ・ハッケン！ キヨリ・アト・イツシュウカソ。ヤツタ・ヤツタ」  
さつきまで火花の散つていた全員が歓喜に沸いた。もともと、冷凍睡眠はどこかの恒星系のハビタブルゾーン（地球と似た生命が存在できる宇宙空間）へ入つたときに終わる仕組みだつた。そして無事、ブラックホールや太陽に飲みこまれずに、惑星が見つかつたというのだった。ロバートが大きなおなかをぶるんぶるんさせて、踊り回つた。

「こんなにも早く、奇跡だな！」

コーラのグラスを引き剥がしてマテウスが言つた。

「おいロバート、まだ空気は人体に合うか分からんんだぞ」  
ドレッドヘアを揺らして、アマレが小突いた。

「嬉しいくせに。ゴスペルを歌おうよ。主の祝福、我らは幸せ！」

オリガがファーティマにしがみついて、さめざめと泣いた。

「主が本当にいるなら地球は滅ばないわ……。でも、お父さん、お母さん、私たち、やつたわ」

宇宙船「地球号」は、そんな個性的な六人を乗せて、惑星の重力圏に入った。展望室で眺めると、その異様な姿に誰もが驚いた。惑星は赤茶けて、サイズも色も金星に近い様子だつた。衛星が二つあり、片方は地球の月ほどで、リングが二本、エックス型に交差していた。もう一方もまた小さいが、地球のように青く、緑豊かに見えた。  
ロバートが切り出した。

「降りるならどこが良いんだ？ 誰かドローンを派遣しただろ。調査結果は？」  
ファーティマがコホンと咳払いした。

「あなたがお菓子を食べて昼寝しまくつての間に、私とウエイがやつといたわ。感謝してよね。金星みたいな惑星は大気も地表も生物が住める環境ではなかつたわ。リングのあるほうは、どうも人工物みたい。作つたとすれば、もう一つの青い衛星ね」

言い終わるか否かの時、ぐらぐらと宇宙船が揺れた。後方から二人の女の子の叫び声がした。

ロバートとファーティマが駆けつけると、宇宙船の天井から大きな管が突き刺さっていた。マテウスが展望室から飛び出してきた。ウェイも一緒にいた。

「窓から見たらさ、なんか変な小型船かな？ そんなもんが後ろにくつついてるぞ！」

管が膨らみ、べつと何か人等大のものを吐き出した。あとから、あとから出てきて、全部で六つのダンゴムシのような硬そうな物体が転がった。それらは起き上がって、アザラシの形態になつた。甲殻アザラシの一体が、一番近くに立ちすくんでいたアマレにのしのしと二足歩行で近づいた。ひげを伸ばして、アマレの顔を触つた。

「いやーっ にゅるにゅるしてる！ こわいーっ」

側で腰を抜かしていたオーリガも金切り声を上げた。

ロバートが「アマレをはなせーっ」とアザラシを蹴り上げた。

アザラシたちの様子が変わつた。体毛が赤く染まつた。怒りの感情のあらわれなのか、攻撃的な相手への恐怖なのか、六体とも後ずさつた。そしてなんと発光し始めた。

マテウスがヒステリックに叫んだ。

「武器は積んでなかつたか！？ シード、場所を教えてくれ、こいつらを殺さなきゃ！」

ファーティマがまぶしさに目を細めながら、宥めるように言った。

「殺すなんて……！ お互いファーストコンタクト同士なのよ。争つてはいけないわ」

「でも、やらなきやバイぞ！」

ウェイがシードを拾つて、マテウスに譲らなかつた。二人で引っ張りあいつこになつた。

管が再び膨らんで、もう一体の生物を吐き出した。体格は他のアザラシより一回り大きく、なんと英語を話した。知的生命体のようだつた。

「お前、暴力、あかんがな。だいじょぶ、悪さ、ない。うちら、安全。よしよし」

アマレがすぐに、蹴られたアザラシへ駆け寄つた。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ 痛かつたでしょ？ 怖がつてごめんね」

大きなアザラシがバオバオ言うと、六体のアザラシたちの発光がやんだ。

ロバートも反省して頭を搔いたが、マテウスが猜疑心に満ちた声で言つた。

「アマレ、まだ信じるのは早いぞ」

その声色のためか、六体の小さなアザラシたちがブイブイと鳴き出した。

大きなアザラシがそれを制して、少年少女たちに言つた。

「突然、悪い、した。謝る。うちら、敏感。嬉しい、怒り、悲しい、分かる。フラツシユ、ちから、持つ。テラ、知つてる。古代、セツション、ある。うち、名前、ナーナ。通訳。テラ、好き」

どうやらファーストコントактではなかつたようだつた。通訳のナーナによると、テラとは地球のことを指し、同じローカルバブル（過去に超新星爆発によつてできた高温低密度の空間）を通過している星々の中でも、滅亡っぷりで有名らしかつた。

六人の少年少女が地球の種子として送り出された後も、人類の文明はしばらく続いた。

しかし自分たちのことを記録しようと、地球のマントルを掘り、核を資源にした記念碑を建てていると、爆発が起って滅んだのだそうだった。ここは一千光年離れた場所で、光子力望遠鏡では地球の残骸が見えるという。英語が伝わったのは、ナーナと少年少女たちのいる現在から千年前のことだった。このローカルバブル圏内ではワープ航法黎明期にあたる年、ワープに失敗して遭難した地球出身の船乗りがいたそうだった。

少年少女たちはまず、地球がもう塵となっていることにショックを隠せなかつた。そしてワープ航法の発明にも驚いた。

オーリガが顔を覆つて、泣きながら言つた。

「あんなに別れを惜しんだのに。コールドスリープで送り出された私たちは何だったの？　念の為？」

アマレがオーリガを抱きしめて慰めたが、言葉も出なかつた。

広い応接間で、ロバートが椅子にふんぞりかえつた。

「つまらないなあ。俺たちがファーストコンタクトじゃ無かつたのか」

ファーティマが勇気を出して、ナーナに尋ねた。

「私たちはこれからどうすればいいのかしら？」

ナーナは船の環境が合わないようで、とろけそうになりながら、ぜえぜえと答えた。

「星、来る、良い。歓迎」

ナーナによると、赤い惑星の名前はロロといい、青い衛星をロロヴァと呼んでいた。もう一つのリングのある衛星はやはり人工物で、発光させる機能があり、つまりロロとロロヴァの月だった。降りる星は青い衛星ロロヴァの方だった。

シードの分析によると、大気は地球より濃度が高いが、重力は三分の一、人体に問題ない成分とのことだった。

「服、着る、良い」

降りる手前に、ナーナがごつい機械を管から取り出して、少年少女たちへ大量の泡を吹きかけた。

「きやつ」

「うわつなにするんだ」

オーリガとマテウスが慌てる一方で、アマレとロバートは「泡風呂みたい！」「ひやつほー！」と喜んでいた。

泡がもともこに全身を包んで、クツジョンのようになつた。

ファーティマが全員を落ち着かせた。

「きっと服つて言つたから、大丈夫よ」

ウェイが指を曲げられないか、グーパーして感触を確かめた。腕に金属の輪つかが付いていた。

「防護服みたいなもんかな？　大気は人体に問題なさそうなのに」  
マテウスが文句を言つた。

「これじやまるで擬態！ あのアザラシ同然だ」

いざ地上へ降り立つたとき、大歓声が待っていた。ロロヴァ星人たちが、白い頭を整然と並べて、旗を振つて、遠くから来た少年少女たちにバオバオ吠え声を送つた。小さなアザラシは子どもだろうか、みんながみんな、身長ごとに整列して少々不気味だった。

ナーナに先導されて、群衆の見守る大通りを歩いた。大統領のバオバオという演説を聴いた。興奮して体毛が真っ赤になつていた。どうやらナーナも恥ずかしくなるほどのお世辞を述べているようだつた。

群衆を抜けた後、都市を見学させてもらつた。ぐねぐねとした、いわゆるアールヌーボーの高層建築物が建ち並び、テラスでプリンのような物体を食べているロロヴァ人たちがいた。そのひとびとも、はつと気が付いて、慌てて旗を振つた。どこもかしこも統制されていて、誰かが自由に遊ぶ姿はまったく見られなかつた。

マテウスがまた口をきいた。

「おい、俺たち華の銀座しか見せてもらつてないぞ。裏通りを覗いてみろよ」

ナーナの目を盗んでそつとオーリガが脇道を見ると、刃物を携えたロロヴァ人が、明らかに身なりの汚いロロヴァ人を追い払つていった。悲鳴をあげそうになるオーリガの口を塞いで、ファーティマが問いかけた。重力が弱いので、大股で歩くだけで追いついた。

「ナーナ、どうしてこんなに手厚くもてなしてくれるの？ そんなに最初の地球人は印象が良かつたの？」

ナーナは答える代わりに、立派な住居を指示した。

「ここ、住む、良い」

六人が入つても、住居は宇宙船より広々としていた。

ナーナは「会議、ある」と言つて立ち去つてしまつた。

ガチャンと扉を閉められて、もう開けることが出来なかつた。

マテウスが騒いだ。

「俺たち、閉じ込められたんだ！」

ロバートが扉を蹴つても、びくともしなかつた。三分の一の重力でふわふわして、力が入らなかつた。

「トイレはどうしたらいいんだよーっ」

こんな状況でも陽気にアマレが、部屋の端っこで言つた。

「これ、トイレじゃなーい？ ほら、流れた！ 水洗があーっ」

泣き虫のオーリガがまた目を潤ませた。ファーティマが頭を抱えた。

「この状況は、どうしたものかしら……ナーナを信じていたのに」

窓から外の様子を見てきたウエイが、不安そうに言つた。

「厳重な警備だよ。抜け出せそうな排気口がある。この服を脱げばいけるんじやないかな。ねえ、シード、大気は本当に、人体にとって安全なんだね」

「モチロン！ シラベタ！ シード・シラベタ！」

「じゃあこんな服、さっさと脱いじまおうぜ！」

マテウスが泡をひきちぎって、ぼろぼろと床に散らかした。我も我もと少年少女たちは防護服を破り捨てた。排気口に全員が隠れたとき、床に落ちていた輪つかが光った。それが合図だったのか、警備のロロヴァ人たちが突入してきた。一番先を行くロバートへ、最後尾のウェイがひそひそ声で言つた。

「早く！ 早く進むんだ」

「無茶言うなつて、腹がつかえるんだよ」

マテウスが頭突きでロバートのおしりを押した。反動で後ろに滑つた。楽しそうにアマレが笑つた。

「やだーつ おならしないでよー」

ウェイが声を抑えて言つた。

「そんなこと気にしてる場合じゃないよ。おならした時はみんな一緒にお陀仏だ」予想通りロバートがぶつとおならをした。通気口は阿鼻叫喚になつた。

「ぐあーつ

「きやーつ」

「うわーつ」

ロロヴァ人たちは開かれた排気口を見つけるが、中へ入ろうとすると強烈な臭いがした。敏感なロロヴァ人にとって兵器を使つたような刺激臭だつた。身体を光らせて、ほかの警備たちに『捕まえろ！』と通達を送つた。

ナーナのもとへも、その光の信号、“フラッシュ”は届いた。せっかく好待遇をしたのに、テラ人たちが勝手なことをしているとは、不思議だつた。

警備隊の長、ディダが『テラ人などやはり信用ならん』と身体を燃えるように赤くした。

た。

少年少女たちが迷路のような通気口から這い出ると、そこは都市とは似ても似つかない、洞穴だつた。民間人の住居がこのようらしかつた。

マテウスが皮肉な笑いを漏らした。

「格差社会つてやつか」

バオウ！ と洞窟に住むロロヴァ人が一声あげて、家族なのだろう、ほかのロロヴァ人を庇う風にした。

ファーティマが、ジエスチャーも言葉も通じないと分かつていても頭を下げた。

「ごめんなさい、巻き込むつもりじゃなかつたんです、かわいそうに」

ロバートが彼女の背中を押した。

「早く洞窟を出て行こう。また兵隊を呼ばれちや、俺たちがかわいそーになる」洞窟をやつと出たとき、かあつと光が穴から漏れ出した。

オリガがファーティマに抱きついて顔を覆つた。

「また光よ！」

「きっと合図なのね。さっきの洞窟の住人だわ。急がなきや。宇宙船はどこに片付けられたのかしら？ シード、分からぬ？」

足下でシードがはねて、機械音を鳴らした。

「ポポポボ……ツキニアル」

月は地球のものより遙かに近く、地表から赤く顔を出したばかりだった。ちょうど良くその月の方角に向かって、アールヌーボーの都市から列車らしきものが走ってきた。巨大で透明な昆虫だった。

虫が嫌いなオリガが「いや一つ なにあれ」と脅えた。

腹の中に民間のロロヴァ人が乗っていた。透明昆虫は生きた移動手段のようだった。中のロロヴァ人たちは消化されることなく、談笑までしているようだった。しかし、テラ人たちを見つけて一斉にぎよつとした。

ロバートが思いついたように言つた。

「ちょっと上に乗せてもらおう」

オリガは絶句した。アマレが突っ込みを入れた。

「あれえ、月に行くって限らないんじやない？ ロバート、焦りすぎ」

ウェイとマテウスが周囲を見回して、ロロヴァ人の兵隊があつちからも、こつちからも来ていると告げた。ひとまずこの場から逃げようと、乗るしかなかつた。全員で嫌がるオリガを助けながら、列車昆虫にしがみついた。重力が弱いので、三段跳びで乗り移ることができた。車内は恐々としていた。

「宇宙人で姿が違うからって、こんなに怖がられるものかしら……」

ファーティマの疑問はすぐに解けた。まばゆい閃光が宙に走り、ロロヴァ人の声が頭の中に響いた。

『千年前の恐怖を忘れるな。テラ人は、我らの統制された社会を脅かす存在。殺戮と資本主義を好むもの。千年前にテラ人は、資本社会という概念と、核技術をもたらし、惑星人口を滅ぼした。奴らは凶悪な雑菌、列車を止めろ！』

マテウスが頬をつり上げた。

「聞いたか！ 雜菌だってさ。こいつらこそ雑魚だよ！」

ロバートが口を開こうとするより先に、ファーティマがマテウスをビンタした。

「差別は差別をうむのよ。地球人に原因があつたつて事よ。ロロヴァ人に罪は無いわ」

先を越されたロバートが慌てて付け足した。  
「そうだ、言い過ぎだよ、マテウス。お前、本当に危ないぞ。これ以上、恨みを買つたらダメだ」

兵隊の長ディダが、列車にむかって物を投げつけた。マテウスの足にべとつと張り付いた。

「なんだこれ？ 嫌だ！ とつてくれえーっ」

ウェイが急いでそれを引きちぎつて捨てたとき、途中でボカンと爆発した。爆弾だつ

た。衝撃で列車昆虫は倒れ、少年少女たちも吹き飛ばされた。

行方不明になつたテラ人たちの処遇をどうするべきか、議会で話し合いが行われていた。

ナーナは今回の爆弾が民間人を巻き込んだことについて、テラ人よりも先にディダを裁くよう発言した。

『あのテラ人たちは、千年前の者とは直接関係がありません。傷つけて良い理由にはなりません。彼ら、彼女らは何も出来やしない。ただ逃げ回るだけで、我々のフラッシュのようないい能力も無い。罪のない、異文化に恐れおののく、同じ生命です。テラ人は愚かですが、皆さんは詩や歌をご存じでしょうか？ 爭いを好まないテラ人も存在するのです』

しかし、いくらナーナが説得しても、議会から許しを得ることができなかつた。それだけロロヴァ人にとつて、千年前の出来事は脅威として捉えられていた。

そんなカビの生えた議会にうんざりして、ナーナは独り町を飛び出した。この美しい星ロロヴァは、果たして本当に調和のとれた社会なのか、改めて民間人の洞窟を見て、列車昆虫の死骸も見て、ナーナは胸にわだかまりを抱いた。

(月のほうへ宇宙船を移動させたはず。テラ人たちがゆくのなら、月だ)

ナーナは技術者向けの輸送船に乗り、月へ向かつた。

(もう一度会つて話がしたい。せつかく念願のテラ人に会えたのだから)

月に到着すると、真っ先に技術者たちへ、宇宙人はいなかつたかと尋ねて回つた。確かに数日前に泡服が六名やつてきた、という情報を得た。背格好を聞くとあのテラ人たちに違ひなかつた。どこかでまた泡服を手に入れたらしかつた。ここでは、泡服でロロヴァ人のような見た目になつていないう宙人は恐れられる。だから着せた。それに気付いたらしく。とりあえず全員生きついて良かった、とナーナは純粹に思つた。テラ人たちの行方を人づてに聞くと、月にある遺跡に逃げ込んだことが分かつた。

遺跡は千年前、月を開拓した惑星ロロの住人のものだつた。

ナーナは初めてそこに足を踏み入れた。ロロ人とロロヴァ人は見た目が違うという認識があつた。フラッシュの能力を持たない代わりに、テラそつくりの文明を誇つていたといふ。そのためナーナはテラに惹かれた。かつての隣の星が、同じ進化をたどつたことへ、古代のロマンを感じていた。

遺跡の壁画には、ロロ人の歴史が描かれているはずだつた。

ナーナはおかしいと思った。ロロ人がおらず、ロロヴァ人に見える絵しか見当たらなかつた。地下へ降りるごとに時代が進んでいった。調和のとれた狩猟採集社会へ、突如舞い降りたテラ人。そこからロロヴァ人によつて農耕が始まつた。いつしか高層建築物が建ち並び、戦争が起つた。そして炎から逃げる一人のテラ人と、ロロヴァ人の子どもの姿があつた。二人は手を繋いでいた。

(ここにフラッシュをおこせという印がある。私たちの祖先かな。現在の認識と食い違つ

ている。ロロヴァ人は惑星ロロにもいたの？ 初めから衛星ロロヴァに住んでいたわけでは無かったの？）

ナーナが壁画に触れようとしたとき、遺跡の奥から泡服が六人、ぞろぞろと登つてき

た。

「あっナーナ！ どうして……」

ファーティマが真っ先に声をかけた。

「俺たちを捕まえようとして来たのか？」

マテウスの疑い深さは相変わらずだった。

「ちっくしょー！ 見つかっちゃった」と奥へ引っ込もうとするロバートを、「まあまあ。見つかったら隠れても無駄だよ」とウエイが押さえた。

アマレが明るい口調で、なんの根拠もない主張をした。

「話をしてもいいと思う。ナーナなら、分かつてくれるよ！」

怖がりのオーリガも頷いた。

ナーナにとって、泡服で誰が誰やら分からなかつた。ただ、自分と会話しようとしている空気は感じることができた。

「ここ、ナーナ、フラッシュ、する。安全、だいじよぶ、だいじよぶ」

ナーナが身体を光らせると、一同はびくとした。また兵隊を呼ばれると思ったようだつた。しかし、ナーナのフラッシュはこれまでのただ光るだけのものとは様子が違つた。

遺跡の壁に映像が映し出された。少年少女たちが観たのは次のような内容だつた。

千年前、地球人の若い女性がオンボロの宇宙船で、惑星ロロにワープしてきた。当時の惑星ロロは緑が生い茂り、海もあつた。女性はロロに暮らすアザラシ型の生物と仲良くなつた。

発光器を持つその生物たちは、女性とテレパシーで会話した。宇宙船の中へ入り、どんどん知識を吸収した。アザラシ型の生物たちは自然の動物そのものの暮らしをしていてところ、数時間で一変した。宇宙船を眺めただけで、経済学・数学・物理学・宇宙工学まで独学で知つてしまつた。数日後には、宇宙船の燃料である核融合の仕組みを解き明かした。海の中に高層建築物を築き、派手に経済を動かし始めた。それは国家の形をとつた。女性は怖くなつた。そこは「平和を目指す」という目的で、為政者によつて思考の自由が奪われ、警察によつて統制された社会だつた。まるで今のロロヴァのようだつた。生活に格差が開き、人工飢餓と環境汚染が進んだ。

地球人の女性は核兵器の開発に反対した。しかし集団から和解を拒まれた。追われる身となつて、早く惑星ロロを離れようと、宇宙船に乗り込んで逃げようとした。追跡してきた軍のフラッシュによつて、宇宙船が爆発した。それに誘引されて、国の持つていた核爆弾が大量に放たれた。こうして惑星ロロは生物の住むことができない星となつた。

かろうじて宇宙へ逃れたのは六人だけだつた。衛星は寒く荒涼としていたので、住むことができるように、もう片方の衛星に発光するリングを作つた。それを月とした。もう一方

を故郷の名前をとつてロロヴアと呼んだ。地面を掘ると氷が出てきた。それを溶かして海にした。開拓を進めて、緑にあふれた星にした。その子孫が現在のロロヴア人だつた。女性と特に仲の良かつた子どもが、月に墓を建てた。哀悼と、自分たちの犯した過ちを忘れることのないように、未来への願いを込めて。

ファーティマがそつとナーナへ話しかけた。

「この映像は本当だと思う。最下層に棺と、地球産の宇宙船のかけらがあつたから」シードがその足下へ転がってきて、ぴょんぴょん跳ねた。

「ブンセキ・カクジツ！ 99パーセント！」

フラツシユが終わって、遺跡は真っ暗になつた。ナーナは決心した。今の映像を、自分の力で全ロロヴア人へ見せよう。

ナーナのもたらした映像は大きな反響を呼んだ。一瞬のそれは、ひとからひとへと噂となつて広がり、衛星はロロヴア人たちのフラツシユで恒星のように明るく光つた。それは議会まで動かした。ロロヴアは惑星ロロと同じ轍を踏もうとしていた。多くのひとが、テラ人と分かり合うことができるかもしれないと思った。兵隊の長ディダだけは、映像を断固として認めず、テラ人を理解したいと言わなかつた。

地球号には、いつか住むことのできる惑星へ到着したときのために、あらかじめ植物の種子を積んでいた。その中でも、放射性物質を除去する菜の花がプレゼントに良いと、六人の地球人たちは相談して選んだ。惑星ロロを修復することは難しいだろうが、ロロヴアに咲かせることによって、友好の印になれば良いという意見だつた。

衛星ロロヴアの太陽は赤くて遠かつた。月のリングのおかげでやつと人間が外で過ごせるという寒い気候なので、温室を建てることにした。少年少女たちはロロヴア人と衝突しながら、時に泣いたり、時に笑つたりして、なんだかんだで協力し合つた。居場所は衛星ロロヴアしかないと六人とも考えていて。

はるか彼方で巨大な宇宙船が、小型船を回収した。それは何万光年も旅したようだつた。

ある知的生命体が扉をこじあけると、中は電気を栄養にする植物で密閉されていた。何らかの生物がいたと思われる場所もまた、その植物で一杯になつていた。これのために船が壊されたと思われた。

ただ、有機物を分解する植物の生えている箇所が、規則的に並んでいた。その植物はすっかり枯れており、カラカラの根の中には骨があつた。全部で六体分あつた。

知的生命体たちは、この骨をどう繋ぎ合わせれば生前の形に復元できるだろうと考えた。そこへ葉だらけの機械が転がってきた。「ポポポ……」と音を発して、かつて宇宙船が壊れる直前に、船自体が乗組員に見せた夢を映し出した。ツタがスクリーンとなつた。

葉だらけの機械は「キボウ……セメテ……キボウ……」と、わけのわからない言葉を喋った。

知的生命体たちは、遺骨の生前の姿や、映像の内容よりも、宇宙船そのものが意識を持つことに興味を抱いた。

だが、電気を栄養にする植物は、どこの文明でも危険だった。牽引して持ち帰るわけにはいかなかつた。映像を可能な限りコピーして、船をまた宇宙へ放つた。

地球号は希望を夢見て、永遠にどこにもたどり着くことはできない。どこかの恒星か、ブラックホールに飲まれるまで、彷徨い続ける。

少年少女たちの見た夢は、それを拾つた知的生命体の博物館で、意味も分からず繰り返し流されている。